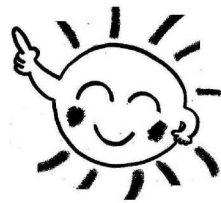


SUNSHINE

第62号 2012年 2月発行
 有限会社 太陽開発
 鹿児島市荒田2丁目43-19 TEL099-255-3623
 E-Mail master91@taiyou1991.com
 URL http://www.taiyou1991.com/



太陽開発

検索 クリック!!

マンションオーナーをご紹介します！ 三田様

今回ご紹介させて頂くマンションは、荒田2丁目にあります「三田ビル」です。1階と2階部分には飲食店が、3階と4階部分が居住用のマンションです。オーナーの三田様は、奥様のお父様が亡くなられた時にマンション経営を引き継がれたそうで三田様は現在、電気工事の会社を営んでおり、毎日とても忙しい日々をお過ごしになっていらっしゃるそうです。たまに、休みの日には、錦江湾や枕崎まで釣りに出かけられたり、ドライブはしないのですが、愛車の660ccのバイクを「いじる」のが趣味なのだとか。最近まで、1階の約30坪あるテナントと3階の2LDK居住用のお部屋が空室だったのですが、現在満室に☆1階には、3月ごろオシャレなフーズバーがオープン予定です。満室となる決め手となりましたのも、築年数が約30年経ったお部屋を三田様が全面リフォーム！新築同様のお部屋になりました☆「自分達が住みたくなるお部屋に」と、「愛する奥様」が重要視されている【水回り】には特に気を使ったり、窓があるお部屋には【サンルーム】を作り桜島の火山灰対策に！「お借りして頂いた方が、みんな幸せになってくれたら嬉しいなあ〜」と、三田様。今後1階のフーズバーもオープンするのでより一層騎射場が賑わえば嬉しいとご夫婦口をそろえておっしゃってました。私も同感です!!! [田淵]



サンルーム♪

床から天井まで！
 全てピッカピカ★

『世界記憶遺産・山本作兵衛の炭坑記録画』

先月、博多で会議があったので、帰りに田川市石炭・歴史博物館で『ユネスコ世界記憶遺産・山本作兵衛の炭坑記録画』を見て来ました。西鉄天神バスセンターより「田川特急バス」で、終点・後藤寺バスターミナルまで約80分。そこから乗り換えバスがあるのですが、接続が悪かったので、タクシーで5分程かけて『歴史博物館』へ行きました。現在、『田川市石炭・歴史博物館』のある場所が「三井田川鉱業所伊田坑」のあった場所だそうです。筑豊(明治以降、石炭資源を背景にして新しく生れた地域区分で、現在の飯塚市、直方市、田川市を指す地名だそうです)、炭坑、ボラ山と聞くと昔読んだ五木寛之の小説『青春の門』の主人公・伊吹信介が田川出身だったことを思い出します。筑豊とは関係ないのですが、信介が自分の血液を売血してお金にする件が、なぜか炭坑と重なって頭に浮かびました。歴史博物館の敷地には、2階建ての本館、赤い鉄骨で組んだ三井伊田坑の竪坑槽(たてこうやぐら)、かつての炭坑住宅(内部には当時の生活用品が展示されています)、炭坑節に唄われた2本のレンガ造りの大煙突等が、当時の面影を残しています。記念館の1階には、採炭現場の精密な模型が展示しており、石炭の採掘、炭坑で働く人々の生活の様子が一目で分かるようになっています。又、男女の労働者の人形がとてもリアルに感じます。2階には今回の目的であった山本作兵衛氏の作品が展示されています。山本作兵衛は生粋の炭坑夫である。少年期には絵描きになる夢もあったが、生活の為に坑夫生活を続け、位登炭坑閉山後の昭和31年頃より、孫たちにヤマの生活やヤマの作業、人情を書き残しておこうと思い、炭坑の絵を描くようになったそうです。描かれている作品には1枚1枚すべて解説文が書き込まれていて、記録画として、当時の世相や炭坑での生活習慣が窺えます。ヤマでの生活は非常に厳しかったと思われそうですが、どことなくユーモラスな面も絵から感じられます。絵としては上手いのかどうかよく分かりませんが、服の柄や炭坑夫のイラストなどが丁寧に緻密に描写され、その色使いにも非常に目を見張るものがありました。今回、『田川市石炭・歴史博物館』を訪ねた目的は山本作兵衛氏の作品が目的でした。しかし、明治以降、日本のエネルギー産業を支えてきた炭鉱業界が国のエネルギー転換政策により衰退していった経緯を知り、又、現在石油エネルギーが原子力エネルギーへと移行し、東日本大震災で発生した福島第一原子力発電所の事故を経験して、国の基幹産業であるエネルギー産業に関わって生活している人々や地球環境問題等を考えた場合、エネルギー産業政策はとて一筋縄では解決できない問題を含んでいると、改めて考えさせられました。 [川越]



採炭現場のジオラマ

YAKITORI天国 有頂天





今回ご紹介するお店は、先月 当社で物件をご紹介させて頂きオープンしました「YAKITORI天国 有頂天、さんです。“来店されたお客様がお帰りの際有頂天になって帰られるのが理想”との思いで名付けましたとオーナー羽山さん。店内はゆったりとした掘ごたつ席、さらにスポーツ観戦を楽しめる大画面テレビのあるカラフルなテーブル席と大小宴会が楽しめるつくりになっています。

取材当日は掘ごたつ席で自慢の串焼き、自家製タルタルソースのチキン南蛮等を頂きました。当社社員には“えいひれ炙り”“ぼんじりの唐揚げ”が好評でしたよ☆

写真の女性スタッフは鹿大の学生で、当社の川越と同じ鹿屋高校出身ということで、気軽に話しかけても笑顔で明るく対応してくれました。おかげでお酒の方もすすみ楽しい時間を過ごしました。オーナーより最大60名様まで入ります是非結婚式の2次会等ご利用ください～お待ちしております(#^.^#) (上釜)



ぼんじりの唐揚げ



タルタルチキン南蛮



有頂天

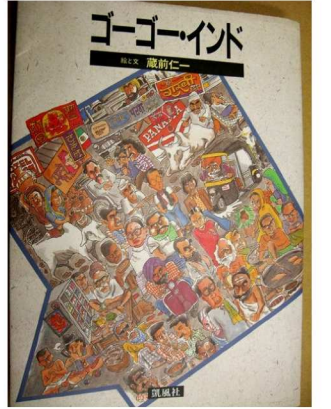


鹿児島市荒田2丁目36-11
 電話 254-7678 定休日 不定休
 営業時間 18:00~25:00

今月の一冊 ゴーゴー・インド

絵と文 蔵前 仁 No.61

1956年1月鹿児島県で生れる。慶應義塾大学政治学科卒業後、グラフィック・デザイナー及びイラストレーターとして活躍するが、突然日本を飛び出して、アジアを中心とした世界放浪の旅に出掛けるようになる。以来、日本と世界各国を往復する生活を送る。帰国後、旅の体験を元にした『ゴーゴー・インド』(1986年)『ゴーゴー・アジア』(1988年)『ホテルアジアの眠れない夜』(1989年)を凱風社から出版。個人旅行者の視点から描かれたインド・アジア世界の楽しさと、旅行のスタイルが多くの旅行者・読者の共感を集めた。現在、装丁家として活躍する一方で、雑誌、P.R誌などに旅行エッセイを連載中。また旅行者のためのミニ誌『遊星通信』を主宰している。(凱風社・ゴーゴー・インドの著者紹介より)



先月号で“プーチン”を紹介したので、今月はその隣の大国“インド”関連の本を読んでもみよう、我家の本棚を眺めると『ゴーゴー・インド』なるストレートなタイトルの本が！しかも著者は同世代の鹿児島出身の方。ご縁を感じ、早速手に取ってみる。しかし、右記のコピーを見て、果たしてインドに行ってみようかなって思うかしら？ただ、最後の一行「ただ僕はインドが好きなのだ」がひっかかる！読めばその魅力が分かるかしらん…と思いつつ読んでみたのだが、残念ながら分らなかった。ただ、どうも気になる。どうしてインドに惹かれて止まない人々がいるんだろう…。しばらくインド迷宮に迷い込んでみようと思う。と言う訳で、次回もインド関連の本を紹介します！

ズルかしこいリキシャマン。図々しいモノ売りドモ。暑苦しいホテル。きたならしいベッド。臭い路地。うるさい乞食ドモ。邪魔くさい牛。満員でオンボロの自動車。僕のカメラを盗んだコソ泥。いまましいインドよ。ただ僕はインドが大好きなのだ。